

ル・コルビュジエの思想と都市計画

04G0408 佐藤奈央

～目次～

はじめに

第1章・前期活動時代－生い立ち～住宅建築の1920年代

1. ル・コルビュジエの生い立ち－建築家になるまで
2. 芸術家としての建築家・現代人のための建築家
3. 建築をめざして－住宅の可能性

第2章・中期活動時代－都市計画の1920年代～40年代

1. ユニテ・ダビタシオン(住居単位)
2. 都市計画(1925～)
3. 輝く都市(1935)

第3章・後期活動時代－1950年～

1. シャンディガール(1950)
2. ロンシャン巡礼教会堂(1955年完成・依頼を受けたのは1950年)

考察・終わりに

参考文献

<はじめに>

ル・コルビュジエといえば、言わずもがなフランク・ロイド・ライト、ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ、ヴァルター・グロピウスらと共に『世界4大近代建築家』と評される巨匠の一人である。鉄筋コンクリートを利用し、平面と技術と伝統から切り離された合理性を追求したモダニズム建築の考案者とも言える彼は「建築・建築家」という概念を変えてしまった男です。彼は「都市計画家」というポジションを始めてしっかりと確立した建築家の一人です。モダニズムの意気揚々とした時代で、彼は彼独自の画期的なアイデアをどんどん発表していきました。建築が都市を作り、都市を変え、再生しうることを発表しました。都市が社会問題を解決することが出来る、何百万人もの生活を魔法のように変えてみせることが出来る、と教えてみせました。しかし彼の思想と新しすぎた建築のプランは、世の人々を混乱させ、反論を巻き起こすことも多々あり、疑問を投げかけたくなるような「穴」も孕んでいます。彼の建築作品は年代によってまったく異なっており、「急進的すぎる」ととられることもあったが、その当時の時代背景と同じような進歩・発展をまったく恐れない姿勢を常にうかがうことができる。前期のグループ発表で、どこまでもモダニストな彼の建築と建築に宿された思想を調べ学んだことによって、今まで建築に何の関心も持っていなかった私ですが、ル・コルビュジエがきっかけとなり街を歩きまわり見まわしたときの楽しさを増やすことが出来ました。そして彼の「時代の先をいく、先見の明」に感心させられたのですー私が気になったのはここです。先見の明をもって都市計画家になったル・コルビュジエなのです。この論文では、彼の業績と思想と生涯を、彼の「視点」と「都市計画」に重点的に着目して、読み解いていきたいと考えています。

<第1章・前期活動時代ー生い立ち～住宅建築の1920年代>

1. ル・コルビュジエの生い立ちー建築家になるまで

ル・コルビュジエー本名シャルル・エデュアール・ジャンヌレーは1887年10月6日に、スイスのジュラ地方にあるラ・ショー・ド・フォンという村で生まれた。後に彼は、自分のふるさととは迫害を逃れてきた人々の避難所のようなところであり、また祖父は1848年革命の指導者の一人であったことから、自分には「自由な思考」と「理想主義」の精神がある、と説明している。彼は自分の父もそうであるように、製品に「装飾」を施すことを目的とする時計の彫金師を目指して地元の装飾美術学校で勉強をしていた。それゆえ彼は大学などで正規の建築教育を受けてはいない。美術学校では彼の製作した彫金の時計が国際展覧会で賞をとるほどの腕前で、彼の才能は明らかに他の生徒より突出していた。それに気づいた彼の教師シャルル・レプラトゥニエが、画家になる道を考え始めていた彼がわずか17歳のときに住宅の設計の仕事を与えてみたが、このときの彼の住宅はジュラ地方の大自然と当時の時流からの影響と思われるアール・ヌーヴォーの様式が濃く、いたるところに自然を基にした装飾めいたものが

取り付けられているものであった。後にル・コルビュジエ自身この彼の建築処女作を「醜悪」である、と酷評している。しかしこの教師の後押しが、彼の「建築家になる」という道を決定付けたことが彼のターニング・ポイントであることに間違いはない。学校を卒業した後に彼はパリではオーギュスト・ペレ、ベルリンではペーター・ベーレンスなどの大都市の建築事務所で修行を行っているが、そこでの生活は、彼に大いなる刺激を与えてくれたと同時に「大都市は、捨て犬のような生活しかない不毛の地にすぎない」と落胆させるようなものでもあった。この大都市の「粗暴」との戦いが、彼の一生のライトモチーフとなるのだった。

2. 芸術家としての建築家・現代人のための建築家

「私は、今日、世界全体を活気付けている動きと密接に結びつきながら学んでいる学生である。私は、われわれの時代、私が信じるその時代を規定している諸要素を分析する。私は単にその外面的な現象形態だけではなく、根底にある意味、構造的な思想を明らかにする—そこにこそ、建築の本質的意味があるはずだ。さまざまな様式や軽薄な流行は幻想、仮想に過ぎず、それらは私には何の関係もない。その逆に私たちの心をひきつけるのは、建築という輝かしい減少である。私はそれを組織化の精神的次元と考えている。それは想像力によって、現代の諸事情の統合を表現するような関係を作り出すことであって、単なる個人的な気まぐれではない。」

ル・コルビュジエは建築家を目指すようになったものの、曲線や模様で施された柱などを作るのに夢中になって、平面を忘れていた建築家たちが嫌いであった。彼は建築家の課題を、装飾家や奉仕家のそれのようなものではなく、その価値を創作行為の痕跡や記録に見出していた。彼は困難な都市計画の課題も、自分の芸術性によって解決できる、と早くから信じていた。彼は「建築家は形態を扱うことで、彼の精神の純粋な創造として、秩序を作り出す。形態によってわれわれの感覚に強く訴えかけ、造形に対する感情を呼び覚ます。そこに生み出された関係は、われわれに深い共鳴を引き起こし、世界秩序との一致を感じさせるような秩序の規範を与え、われわれの上や心のさまざまな動きを確定する。その時、われわれは美を感じるのだ。」と語っている。彼の言う建築本来の美とは、外面の装飾の美しさではなく、立方体・角錐・球といった立体の“光の下に集められた、巧みで性格、壮麗な演出”によるものである(光は彼にとってどの作品でも重要な問題である—芸術家を目指し、日が当たらない暴力と病気の溢れたパリの裏道の廃れた地域で暮らしていたこともある彼にとって、このような地域は真っ先に絶滅させなければならないものであった)。建築の立体としての幾何学的秩序と調和が“人を思索させ、感動させる”ことによって、建築は科学性と合理性の究極の追求を超えた芸術としての意味を獲得することができる—彼の思想の根本には、世界を把握し、その秘密を見抜き、秩序を与える芸術家という自己意識が根ざしているのである。

1920年代のアヴァンギャルドの建築家たちのほとんどは、自分たちの可能性と使命とあ

らゆる理想は機械によって実現されることになるであろうということを信じて疑わなかった。ル・コルビュジエもちろんその中の一人で、自らの建築によって新しい世界を生み出すことを目指していた。彼は必要とされる世界の秩序が、まず始めに建築において実現されると考えていた。そのことから必然的に、建築を自立的に決定することがほかのすべての問題の解決にもなり、その否定は世界を破滅させるという思想を導き出したのです。そして彼はこう語りました。

「この社会の輪転ははなはだしく乱されており、歴史的な意義のある飛躍へと向うか、あるいは破局に至るか、という選択の岐路にある。すべての生物の本能は、安息所を確保することに向けられる。今日社会の各層で働いている人々は、もはや彼らにふさわしい安息所を持っていない—勤労者も知識人も。建築の問題にこそ、今日の壊れた均衡を再生する鍵がある。建築か、さもなくば革命か。革命は避けられる。」

この時代の生産性の発展、人口増加や公害の発生などが問題となっている社会背景をもとに、崩れている人々の生活のバランスを建築のみが修正し、新しい社会への調和と秩序を与えることができ再び安定をもたらすことが出来るとル・コルビュジエは考えていた。ル・コルビュジエのスケッチ画を見ればすぐにわかることだが、彼の構想画に書き込まれる人物の多くは、休息をとっているかのんびりと余暇活動を行っている。さらに採光たっぷりの窓際には、肘掛け椅子が置かれていることが多い。彼は、住居が変化と不調和の中で生きる人々の精神と健康に安息をもたらすことが社会のためにも必要不可欠である、と説いた。

3. 建築をめざして—住宅の可能性

「住宅の問題は時代の課題だ。社会の均衡は今日その問題にかかっている。—優れた配置の量産住宅による住宅地は、静けさ、秩序、清潔さの感情を引き起こし、住民に規律をもたらすであろう。」

「立体と面は建築を表明する要素である。立体も面も平面によって決定される。平面からすべてが生じる。想像力不足の皆様にはお気の毒だが！」

ル・コルビュジエによると、「住むための機械」と断言した彼の住宅建築における最も重要な転機は、1914年のドミノ・システムの発見であった。ドミノ・システムとは、鉄筋コンクリートによって可能になった骨組み構造から、ル・コルビュジエが引き出した急進的な美学である。鉄筋コンクリートの骨組みが床・天井・階段を支えているので、壁が一切重荷を受けていないためそれにより住居の内部空間の分割や外壁の造形においても、大きな自由と変化を与えられるものだった。このシステムには後に屋上庭園が付け加えられ、一番下の床は地面から持ち上げられた。このドミノ・システムの発展が彼の近代住宅建築の重要な基本事項となる「近代建築の5原則」に至らせたのである。

「近代建築の5原則」とは、①ピロティー、②屋上庭園、③自由な平面、④水平連続窓、⑤自由なファサード、の要素である。

①のピロティーは、一階部分を持ち上げて空間を作ることによって、すでに大量生産が始まって、所有者も増えていた自動車のための駐車場として利用したり、また来るべき交通渋滞に備えて、ピロティー部分をそのまま自動車が走り抜けてしまえるようにつくられたものである。

②の屋上庭園は自然との共生を目指すル・コルビュジエが都市で暮らす人々にとって精神的に欠かせないものである、として組み込んだものであり、③の自由なファサードとは、鉄筋コンクリートの骨組みにより外壁が重荷を受けないため、外壁全面にガラスを用いることが可能になったが、これは貧困や欠乏としてではなく、空間や光や空気の獲得である、と感じさせる彼の意図が反映されたものである。それが④の水平連続窓へとつながり、住居の内部空間をどのようにでも分割できるというこのシステムの特権が、⑤の自由な平面である。この5原則は1926年にこそ確立はされたが(1926年の作品、クック邸ですべての5原則が採用された)、それ以前の彼の住宅建築作品からずっと見られるものである。たとえば1922年のシトロアン住宅で「白い箱」住宅と可動間仕切による自由な平面の採用が始まり、1924年のラロッシュ邸でピロティーがはじめて出現している。彼の作品のこれらの要素は、伝統を前提としてみればいたるところで期待を裏切るもののように見えるが、すべてが驚きと新しい期待に満ちている、と言うことも出来る。その想像力からは形態が創造されるだけでなく、さまざまな要素に生活のための新しい定義を与えるものでもあったのだ。

<第2章・中期活動時代―都市計画の1920年代～40年代>

1. ユニテ・ダビタシオン(住居単位)

ル・コルビュジエはこれまで多くの一個建て住宅を設計してきたが、彼の住居構想は都市計画と結びついて変化が生じ始めていた。そして最初に提示されたのが「独立住宅を集めた共同体に住む」というテーマの下に作られた、1922年の『イムーブル・ヴィラ』だった。このイムーブル・ヴィラの着想を与えたものはカルトジオ会修道院という施設だったが、ル・コルビュジエは修道院の共同体における社会的関係は都市の住居のそれとはまったく異なっているのにも関わらず、自分の理想の都市計画へと組み込んでいった。さらに客船やホテルの要素も組み込み、「プライベートな住居と共同利用のサービス施設の結合の新しい生活」というのも彼の理想の共同生活体のテーマのひとつになった。

共同生活における新しい集合的な住居の形態は、19世紀にさまざまな建築家によって繰り返して試みられているが、一番熱心に行っていたのは1917年以降の旧ソヴィエト連邦だったといわれている。革命後で瞬間に都市に人々が流れこみ、都市の人口が爆発的に増加したため、その緊急的な住宅不足の解消が社会主義的な生活形態の模索と結び付けられたからである。その模索と試みの過程は、旧ソヴィエト連邦の建築家たちがル・コルビュジエの思想

から学んだものとも、逆にル・コルビュジエが旧ソヴィエト連邦の建築家たちから影響を受けたものとも言われている。しかし両者の決定的な違いは、旧ソヴィエト連邦の建築家たちの多くがブルジョワ的、反革命的と揶揄された私的な空間を出来る限り縮小しようとしていたのに対し、ル・コルビュジエは逆に私的な空間を出来る限り広めて改良を行っていた、という点である。彼は集合住宅をあくまで「眺望の良さを手に入れた独立住宅の集合体」と見なしていたことが伺える。

このイムーブル・ヴィラをさらに発展させたのが、ユニテ・ダビタシオンである。これは「輝く都市」を構成する集合住宅の単位であり、そして彼の説明によればユニテ・ダビタシオンは「心理学的・生理学的定数に基づき、生存の諸条件を緩和し、住民の身体的・精神的な健康を確保する。健康な教育に必要な施設を備え、生きる喜びをもたらす、住民にとってきわめて重要な社会意識を呼び起こす」ものであった。ル・コルビュジエが考えるユニテ・ダビタシオンがもたらす居住の構想は、ユニテ・ダビタシオンは新しい機械時代の世代の提案であり、それは①家族の領域における家族生活(すべての成員個々の権利・その領域個々の自立性がある)、②建築の構成要素の規格化・標準化(これにより今後、大工業による大量生産が導入され、建築芸術を現代の生産のリズムに適合させることが可能になる)、③近代的な組織と技術の持つ方法や手段を用いて、生産を迅速にし、能率的な生産とコストの劇的なまでの低減を実現すること、だった。彼の作ったマルセイユのユニテ・ダビタシオンは、独身者用から10人家族用まで全23タイプ337戸の住居があり、それぞれ2戸ずつの住居が『屋内街路』としての廊下に沿って向かい合わせ担っている。ガラスの壁は素晴らしい眺望を与えてくれ、真ん中の階には食料品店街や本屋、郵便局にレストランなどが入っていて、屋上庭園には体育館、運動場、ビュッフェ、バー、公園、日光浴場、幼稚園が敷設されている。屋上庭園とピロティーは彼の独立住宅から、独立住宅の集合体のような住居単位はイムーブル・ヴィラからの継承である。このマルセイユのユニテ・ダビタシオンは建設中から建築団体、医療機関から非難轟々で、フランス総合美観保全協会からは「人間性に対する違反行為」として賠償金と建物の取り壊しを国に訴えられるほどであった。しかし当の住民たちには大変評判が良く、見学希望者は後を絶たず、今日でもマルセイユの最高の住居施設の一つとされている。

しかしこの成功は必ずしも都市計画面での発展をもたらさなかった。この後のナントやベルリンに作られたユニテ・ダビタシオンでは、莫大な工費と期間などの問題により施主の考えで共同施設のアイデアは取り除かれたただの集合住宅へと戻されてしまい、完成度も完成後の維持も悪く、低所得者が住みつき犯罪や暴力が発生し社会問題の温床となってしまったのである。結果としてこのユニテ・ダビタシオンから現在の都市計画に継承されたのは、効率性ばかりを優先して共用スペースも緑もテラスもない高密度で住み心地の悪い集合住宅、つまり現在、日本の都市であちらこちらの建っているアレである。

2. 都市計画(1925～)

「都市の機構は、適応の問題にすぎない。完全なものがあれば、人々はそれに調子を合わせる。また快適でないものにも、良かれ悪しかれ適応する。快適でないということも、一時的なものにすぎない—ちょうど技術的な完全性も過ぎ行くもので、明日には玉座を終わられるように。」

ル・コルビュジエは1925年に彼の都市計画に関する最初の著書『ユルバニスム(都市計画)』を発表した。当時の都市計画とは、道路・公園などの配置や上下水道の整備、それに美しい街並みを作ること、と理解されていた。しかし彼は、ここの施設の配置や外観の化粧よりも、街全体を秩序立てることを、都市計画として提案したのである。彼の意図は「特定の条件を解決するのではなく、厳密な理論を構築することによって、現代の都市計画の基本原理をつくる」ためであり、場所を特定しない普遍的な条件の下での理想都市モデルを提案することだった。その本の第一部では、現在の都市がいかにバランスを失い崩壊しているかという状況の説明と彼の都市改造計画の必要性・必然性を声高々と投げかけており、第二部では「三百万人のための現代都市」、そして第三部ではパリの「ヴォワザン計画」について書かれている。社会の変化に対応できず力を失った都市と人々に近代的な生活を正常な状態に機能させるためには、すべてをさら地にして都市を作り直すほどの必要があるのに関わらず、人々はなかなか過去のものにしがみついて離れようとしなない…だとすれば、人々が近代社会の要求に自ら進んで従うような状況を作り出すことこそ、建築の課題だ、と彼は述べている。

そしてこの本の中で、都市の機構再建でもっとも重要とされるべき問題は交通機構である、とも述べている。また、「差し迫った危機に正しく対応する4つの厳格的確な公理」として、①交通の要求に応えるために、都市中心部の閉塞状態をなくすこと、②事務活動に必要な接触を実現するため、中心部の密度を高めること、③交通手段を拡充すること—すなわち近代の交通手段の諸現象に対して無力になった既存の街路を完全に変えること、④樹木面積を増やすこと—なぜならそれは事務活動の新しいリズムが要求する細心な仕事に対して、それに必要な静寂と健康を十遍に確保する唯一の方法であるから—と、具体的な解決策もあげています。

彼が何故ここまで都市の問題に自分の労力を捧げていたかということ、彼は大都市が国の生活を支えている、と考えていたからだった。つまり大都市が窒息すれば、国も窒息する。これから訪れるだろうさらなる機械化の到来に際し、大都市の支配力はもっとも絶大なものになる、と信じていたル・コルビュジエにとって、時代に即した都市改造は必然だったのである。だからどんなにまわりから批判されようとも、彼は正しいのだから(と、信じているのだから)、晩年までその態度と挑戦を止めることはなかったのである。

3. 輝く都市(1935)

1935年にル・コルビュジエは都市計画に捧げたもっとも包括的なものとして『輝く都市』—光り輝く都市—を出版した。この計画案は、『三百万人の現代都市』、ヴォワザン計画の思想

を大部分引き継いではいるが加筆・修正されたもので、大きなポイントは「現代都市」という言葉を使わなかったこと、住宅地区に変化の焦点が当てられていること、建築と自然の結合が大きく取り扱われていること、である。

輝く都市とはどのような都市かという点、

①都市は9つの平行する帯状の地域(教育のための衛星都市、業務地域、交通地域、ホテルならびに大使館地域、住居地域、緑地帯、軽工業地帯、倉庫と貨物鉄道、重工業地帯)に分けられていて、住む・働く・遊ぶ・移動するという機能に徹底的に応じたゾーニングをされた機能的で合理的な都市である。

②十字型平面の超高層ビル群(摩天楼)—低層過密な都市よりも、超高層ビルを建てて周囲に緑地を作ったほうが合理的であるから中心部の利用密度を上げることの必要性を説いた。

③住宅は入隅型住居で人口増加に対応

④あらゆる建物はピロティーにより高架になっている

⑤プロダクトデザイン的な都市の形状—時間と場所による偶然性を排除し、応用可能でどこでも適用可能である。

⑥出来るだけ多くの空間が緑地帯を設けられている。都心部の地面の95%は公園として利用される、屋上庭園ももちろんある。

⑦四方に発散する都市の軸—軸の厳格さはコルビュジエにとって精神的であるのと同時に美的な基本的原則である。彼の出生地ショー・ドゥ・フォンは火災で焼失しその後再建されたが、その際中央に並木道のある巨大な軸が通された。これが町に思いがけぬ荘厳さを与えた。彼のこの記憶によるものと考えられる。軸は高速交通でもあり、視覚的に象徴する役割も持っている—道路問題を提起したのは先見の明。自動車の流れ(流通)を歩行者と分離させる。(交通路の分離)

それまでの《都市計画》とは、問題の部分的で小規模な改良に過ぎなかった。ル・コルビュジエのこの計画案にはそのような繰り返される混乱状態から、都市計画を《時代に即した》水準に持ってこよう、という意図があった。彼ははじめて、問題を全体から捉えて、建築的・社会的・経済的側面から同時に扱ったのだ。それは彼が、建築と都市計画は工業化・機械化が引き込んだ混乱の中から、また一時的な場当たりの対策によって引き起こされた混乱から社会を救い出し、調和に満ち秩序のある世界へと導くことが出来るだろうと考えていたからである。

緑の真只中に立つ高層ビルの姿は今日ありふれたものになっていて、彼の着想がこれ以降の都市計画に大きな影響を与えているのは確かである。なぜならこの「輝く都市」は、今までの《この場所の、今における特定の》問題を一時的に解決するためだけの都市ではなくて、それまでよく理解されていなかった問題や、交通や集合住宅などのこれからおこるであろう問題にも先見の明をもって、多種多様で複雑なすべての都市問題をわかりやすく単純化して解決するための都市だったからである。「輝く都市」はさまざまな都市機能に対して開かれているので、都市の種々の段階での土地利用の可能性を予想しえる限りにおいて、すべての高

密都市化計画の出発点であり続けている。

<第3章・後期活動時代－1950年～>

晩年のル・コルビュジエは、都市計画や住居のような問題からは距離を置き、それに代わって発展途上国の公共建築や巡礼教会堂、修道院や展示空間といった特殊な課題に進んで取り組むようになっていった。それゆえ晩年の彼の建築作品は以前の彼が没頭していたような仕事とは本質的に異なるもののようにすら見える。彼の晩年の作品は、それが依頼された状況や敷地の条件を知ることではじめて理解できるようなものになっていった。

1. シャンディガール(1950)

1950年にインド政府から依頼されたパンジャブ州の新都シャンディガールにおいて、ついにル・コルビュジエは、初めて都市全体を計画するチャンスに恵まれることになった。このような仕事を実際に一人のアヴァンギャルドの建築家に依頼されたのは、周囲の人々にも驚きを与えたようだったが、この仕事がル・コルビュジエのもとにたどり着くには、それなりの経緯があった。はじめはネルーが彼の知人のアメリカ人建築家アルバート・マイヤーにすべてのシャンディガール市の改造計画を依頼したのだが、マイヤーが計画案を作成すると、実際の設計は当時まだ無名であったマツヒュー・ノヴィッキーという若く優秀な建築家に委託された。しかしその後ノヴィッキーは飛行機事故で亡くなってしまい、ル・コルビュジエに依頼がめぐってきた、というわけである。そして彼がとった策は、いとこのピエール・ジャンヌレと弟子の建築家を現地に駐在させ、ピエール・ジャンヌレたちがマイヤーとノヴィッキーの案を完成させることに、ル・コルビュジエは首都としての公共施設地区、カピトル地区の計画のみに専念するような計らいになった。なによりこの時のインドはイギリス植民地支配の終わりとともに始まった宗教対立の後、インドとパキスタンに分割されたばかりで、パンジャブ地方も二つに引き裂かれてしまったばかりだった。パンジャブ州の州都であったラホールはパキスタン領に入ってしまう、インド側のパンジャブ州には難民・飢餓があふれ、単に早急に新しい州都が必要であったけれども、さらにそれを新しい国家の存続と未来への信頼を象徴する輝かしい意思を含んだ州都に“作り直す”必要があったのである。ネルーも「これをインドの自由を象徴する新都市にしなければならない。過去の伝統に惑わされることなく…国家の未来に対する信念の表現となる。」と、表明している。シャンディガールはまさしく建築の偉大な冒険が行える場所であったのだ。シャンディガールにはまだ貧しさ・混乱が残り、発展途上国で西洋文化圏でもない。諸々の問題はあったが、インドがこの都市にかける理想が、ル・コルビュジエの建築思想に近いものがあるように思われることも、この計画が彼にめぐりめぐってきた要因のように伺える。

しかし実際ル・コルビュジエはシャンディガールの都市改造計画には口を出さず、出来上がった都市は「現代都市」や「輝く都市」の面影が何も見られない、彼の「輝く都市」信奉者たちをガッカリさせるものであった。彼の興味はカピトルのみに向かった。彼が建設した公共施設には、高等裁判所と集会議事堂、美術館などがある。その三つはまた独創性にあふれたかたちであるが、インドの灼熱から人々を保護するために設計された巨大で力強い庇のような屋根や、民主的な裁判所の公開性を象徴している入り口ホールなどの公共空間などそのひとつひとつには彼なりの思想と理由がこめられているものだった。「輝く都市」には何もシンボル性のある建物を置かなかつたのに、ここでは彫塑性に満ち、象徴性の高い建築群が、インドの風土と伝統に配慮されて並び立っている。さらに彼は「開かれた手」という風見鶏風の平和と愛と団結を表現したモニュメントをつくった(当時は作られなかったが、世界中からの寄付金で彼の死後に作られた)。シャンディガールの最初の設計者のアルバート・マイヤーはこれらの作品の見解をこう述べた。「大きなホールや斜路、そして巨大な柱は、高貴で力強く、根源的とも形容し得るような体験をもたらす—ただしこの裁判所は、現実の建築というよりは、むしろ雄大な彫刻作品ではあるが。」

そう、これは彫刻作品である。なぜ彼は「輝く都市」現実化のチャンスを簡単に放棄し、建築家の道を選んだのか。今までよりさらに人間の精神に触れようとする造形作家への道を選んだのか。インドという発展途上国でという条件も関係あったのだろうか、彼は機械的な要素を捨て、風土と歴史と精神を最優先で汲み取った建物を造形することに満足をするようになったのである。

2. ロンシャン巡礼教会堂(1955年完成・依頼を受けたのは1950年)

一見しただけなら、ル・コルビュジエの作品とはなかなか気づかないだろう。しかしこれはル・コルビュジエのもっとも有名な建築作品のひとつであり、もっとも有名な近代建築作品のひとつでもある。曲線に歪んだファサードにずっしりと大きなこぼれてきそうな屋根、高さの変わっている天井など、この建築からは彼の作品の代名詞である機能性や合理性の要素がほとんど伺えてこない。折りしもこの時期は、1950年代のインターナショナル・スタイルの凱旋によって、かえって技術と合理性を前提とした建築の限界が露呈し、それと結びついた未来への希望が幻想であったと人々が気づき始めていたときだった。そんな中でそのような建築のパイオニアと見なされていたル・コルビュジエがこのような建築を作ったものだったから、反響と批判、論争が大きく巻き起こった。この作品はいったい彼のどのような意思で作られたのか。

巡礼教会堂というものを手がけるにあたって、ル・コルビュジエは「一人ひとりの精神の集中や瞑想の器となる姿」そのものの建築を作ることが、この仕事の報酬である、と語った。その造形の探求は、ル・コルビュジエを形の分野での音響成分の認識へと導いていった。循環・相互依存・類同性…音響と同じように繊細で厳正な現象へ。そこから彼はロンシャン巡礼教会堂の建つ場所から、その現場の近辺にある丘・谷・水平線のハーモニーにこたえを返し、それ

らを受け入れる形を構想した。巡礼教会堂を作るにあたって、彼にとって重要だったのは、神学もそうであるが、やはり芸術性であった。屋根・ファサード・塔などの変化にとんだ形態からなる集合体に仕上げたのは、遠くから来る巡礼者たちの目印となり、丘の上の中心としての役割を与え、中に祈りの空間を内包する建築のためには必要だった。曲線を描いて上部が薄くなっていく外壁はと分離した外壁をまとめるような巨大な屋根は、丘の頂の輪郭と関係付けられ、また巡礼教会堂と周囲の関係をできるだけ密接に見せる象徴である。分離した外壁はその隙間から中のマリア像を見せ、内部からは外部を意識させるためだったり、曲線を描いた壁は、その前に説教壇を設置し視覚的に説教壇に立った牧師が内部の人々を「包み込んでいる」ように見せるためだったり、などなどそれぞれの形態には性格と関係が持たされている。窓も、スタンドグラスなどは無しのあくまで採光を取り入れるためのもので、あたかも信徒が壁にその時々必要に応じて徐々に開けていったかのように見せている。この建築作品は、その構造は以前にはまったく考えられないようなものだが、信徒の手と自然の力によって徐々に築き上げられてきたもののように見せられている。歴史から切り離された素朴で根源的な生活の、人間にとって本質的な世界を表現しているのである。この建築によって、建築を外部に対して境界を持った箱、とみなす考えは放棄された。そして、建築の一部を再び自然に返しているのだ。1955年の竣工式の日、ル・コルビュジエは感極まって目に涙を浮かべながら、ブザンソンのデュボア大司教に礼拝堂の鍵を渡したという。

晩年を修道院や教会などの小規模な建築の活動に専念し、自らの生涯が終わりに近付いてきたとき、彼はこう言ったという。

「私は人間に今一番必要な静寂と平和のために働いた。」

<考察・終わりに>

以上見てきたように、初期・中期とモダニズムの精神で革新的・急進的に都市改造計画を追求し走り続けてきたル・コルビュジエだが、後期ではその方向性が転換されたかのように思われる。しかし本当にそれだけなのだろうか。どんなときでも彼は建築作品に合理性や機能性とともな芸術性も重視していた、矛盾しているが機械信奉者で芸術至上主義者だった。その芸術性の優先が建物の機能に問題をきたすこともあったのだが、彼の作品の新しさと理論がそれらをうまくカバーしてきたのも事実である。晩年の彼の作品では芸術的オリジナリティーと場所性と精神性が、今までにくらべて優先された。しかし、「人間性に欠ける」と揶揄されやすい彼の作品だが、ずっと伝統からの変化を恐れずに未来を切り開いてきたこと、今ある社会との共存を目指してきたこと、採光や公園など環境との結びつきを重視してきたことは、彼が初期からずっと続けていたことである。都市計画で“現代”のため“現代”にはまる建築をつくらうと奮闘していた彼は、晩年にはその場所の風景と精神にはまり、何十年後にもその建物が自然に存続しているような建築をつくることに専心するようになった。どの大都市にも応用

することが出来る都市をつくるのを辞め、その場所に合うものをつくることに気持ちを切り替えただけだ。今までと違って先進諸国の都市でなく、アジアの発展途上国や修道院での建築の仕事が多くなったからかもしれない。彼の作品は新しかっただけでなく、数十年経った今でも残って、参考にされているのが、彼の建築と理論が本物であった証拠だろう。

彼は晩年にラ・トゥーレット修道院を作成中に撮られたインタビューで、こう語っている。
「住居とは家族にとっての神殿である。その中にこそ、人間の幸福の大きな部分があると私は信じている。何故私がそれ程人間の幸福にこだわるのかはわからないが、人間の痛みを和らげる努力をすること、生きる喜びをもたらすことを私は愛している。」

ウォシャブ邸もユニテ・ダビタシオンも都市計画もロンシャン巡礼教会堂も、すべて人間の生活をより良くするために考えたものである。私には、彼の建築の合理性や機能性ばかりがお手本とされ、ル・コルビュジエの本当の精神は都合のいいところだけを切り取られて今、参考にされているように思えてならない。ル・コルビュジエの精神を正確に受け継いで再現した建築を建てることは、今の時代でもまだとても意味のあることではないだろうか(都市計画をまるまる再現することはさすがにいいとは思わないが)。私はそう思っている。

<参考文献>

スタニスラウス・フォン・モース『ル・コルビュジエの生涯－建築とその神話－』彰国社 1981

八東はじめ『ル・コルビュジエ』岩波書店 1983

吉坂隆正『ル・コルビュジエと私』勁草書房 1984

ノルベルト・フーゼ『ル・コルビュジエ』パルコ出版 1995

東秀樹『荷風とル・コルビュジエのパリ』新潮社 1998

越後島健一『建築形態論－世紀末、ペレ、ル・コルビュジエ』2002

ケネス・フランプトン『現代建築史』青土社 2003

Wikipedia

※文中に出てくる斜体の言葉は、すべてその章で取り上げている時代のル・コルビュジエ本人の発言である。